

Newsletter

March 2019

<http://www.aack.info>

目次

京都大学ブータン友好プログラム 2018 :
第 4 代国王に謁見

松沢哲郎1

マサ・コン峰の頂上

横山宏太郎.....7

アネサ伝

渡辺良男、中島道郎、新本政子、前田司.....8

笹ヶ峰ヒュッテ小屋番の思い出

(1964 年～ 1967 年)

渡辺良男13

チョゴリザ登頂 60 周年記念の会

—公益社団法人 日本山岳会講演会ほか—

高村奉樹17

第 48 回雲南懇話会のお知らせ

山岸久雄20

会員動向20

編集後記20

京都大学ブータン友好プログラム 2018 : 第 4 代国王に謁見

松沢哲郎

ブータン王国を昨秋訪問した。第 4 代国王ジグミー・シンゲ・ワンチュク殿下と 2018 年 11 月 23 日にお会いすることができたので報告する (図 1)。

ブータンのソナム・デチェン・ワンチュク王女が前年の 2017 年 10 月 21 日から 27 日まで来日された (文献 1)。京大とブータンの友好 60 周年を記念する行事として記念シンポジウムを京都大学で開催し、山極壽一総長 (AACK 名誉会員) ほか多数の方々の出席を得た。この王女の訪問については、『ヒマラヤ学誌』19 号に、その詳細を記録として残した (文献 2、3、図 2)

ソナム・デチェン王女の招きで、1 年後の 2018 年 11 月下旬にブータンを訪れた。2010 年 10 月に始まった「京都大学ブータン友好プログラム (<https://www.kyoto-bhutan.org/>)」の第 17 次隊と位置付けられる。

隊の構成は、以下の 8 名である。
山極壽一、京大総長、AACK 名誉会員

松沢哲郎、京大高等研究院、副院長・特別教授、AACK 会長

西谷祐子、京大大学院法学研究科、教授
坂本龍太、東南アジア地域研究研究所、准教授・
医師、AACK 会員

加藤恵美子、京大大学院医学研究科、博士課程
大学院生・医師、AACK 会員



図 1 2018 年 11 月 23 日、第 4 代国王に謁見した (提供：ブータン王室)。



図2 ソナム・デチェン・ワンチュク王女と山極壽一京大総長。(撮影、2017年10月26日、提供：京都大学ブータン友好プログラム)。

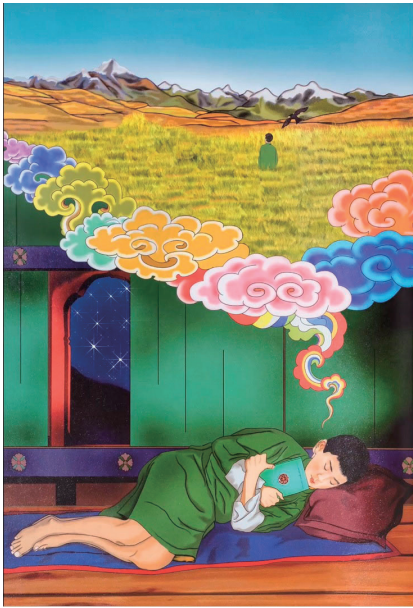


図3 王女の制作した絵本『カラスが語る、ブータンのお話』がアニメーション化された(提供：京都造形芸術大学)。

竜野真維、京大大学院医学研究科、博士課程大学院生・医師

松井一純、京大高等研究院、事務部長

松永倫紀、京大高等研究院、事務掛長

2018年(平成30年)2月末に渡航計画を立案して、11月を念頭に渡航準備を始めた。渡航に際して3つの課題があった。

①王女から託された英語の絵本がある。原題は”The Raven tells a story”で、UNICEFの支援を受けてブータンで発行されたものだ。これを『カラスが語る、ブータンのお話』(左海陽

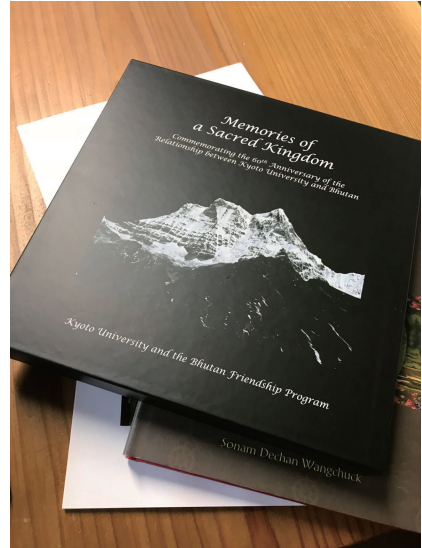


図4 交流60周年記念英文写真集『Memories of a Sacred Kingdom』(撮影、松沢哲郎)。

子訳)と題して翻訳した。ブータン王国憲法の成り立ちとその意義について、1人の少年シンゲの成長とともに、わかりやすく記述した作品だ。2008年に発布されたブータン王国憲法を、わかりやすいことばで書き記したものだといえる。これについては、『ヒマラヤ学誌』20号と、京大ブータン友好プログラムのホームページで公開している。

②絵本のアニメーション化については、京都造形芸術大学の学長の尾池和夫先生(元京大総長)を通じて、造形大の丹羽貴大教授と西井育生准教授を紹介いただいた。それによって、全編をe-book化することができた。さらに冒頭部分について、1分間のアニメーション化ができた(図3)。e-bookとアニメーションの双方を内蔵したアップル社のiPadを京都造形芸術大学のほうからご寄贈いただいた。再会の折にソナム・デチェン王女に手渡した。

③京大の60年間の映像資料については、今回の隊員の加藤恵美子と竜野真維の2人の大学院生が担当して関連資料を集めた。その結果として、『Memories of a Sacred Kingdom』と題した英文の写真集を作成することができた(図4)。ブータンに持参して第4代国王、第5代国王ほか関係者に贈呈した。なお、掲載には間に合わなかった貴重な資料や、今回の訪問の写真を含めて、適当な時期に改訂版を刊行する予定である。

こうした京大に所属する資料と並行して、1958年の中尾佐助氏（AACK 会員、大阪府立大学助教授＝当時）のブータン踏査の貴重な資料が大阪府立大学の中尾佐助アーカイブとして保存され公開されている。これについては、京都大学霊長類研究所長で京大ヒマラヤ研究ユニット長である湯本貴和教授を介して大阪府立大学の山口裕文先生と交渉していただいた。その結果、中尾資料だけをまとめたCDとその解説文書を山口先生からいただくことができた。実際に、11月23日の第4代国王との面談時にそれを手渡した。

以下に第17次隊の行動の概略を述べる。『AACK ニュースレター』という媒体に鑑みて、山をめぐる話題に焦点を当てて報告する。なお、詳細については『ヒマラヤ学誌』20号に寄稿したのでそちらを参照されたい。

2018年11月20日の朝に全員がパロ空港に集結した。今回の旅の差配をしてくれたブータンの旅行会社ローメン・ツアーズ（現在は、ブータン・ローメン・アドベンチャーに改称）を主宰するカルチュン・ワンチュク氏らの出迎えを受けた。カルチュンとは1995年の最初のブータン渡航以来、20余年にわたる旧知の間柄である（文献4）。

20日の午前中は、マイクロバスでパロ近郊に建設中のJSW法科大学（Jigme Singye Wangchuck Law School）を見学した。ブータン初のそして唯一の法科大学である。現在の第5代国王の勅命で2015年に創設された。今回の招へいの対応者であるソナム・デチェン・ワンチュク王女が総長を、サンゲイ・ドルジ氏が学長（学務長）をしている。大学はスタートしたが固有のキャンパスがまだない。パロ郊外に新キャンパスを造成中だった。建設現場を視察した（図5）。大学の建物は伝統的なブータンの建築様式である。現場を指揮する方々が若い女性たちだったことが印象深かった。すでに1学年20名程度の学生の募集が始まっており、また外国人教師も配置されていた。

パロのJSW法科大学の建設地を視察したあと、車は首都ティンプーに向かった。わたし自身でいうと、1995年、2010年、2013年に続いて、この2018年が4回目のブータンの訪問になる。20余年を隔ててみると、ティンプーは毎回着実に宅地化が進んで、建物の数が多くなってい



図5 パロに建設中のJSW法科大学キャンパスを視察した第17次隊（提供：京都大学ブータン友好プログラム）。



図6 ドチェラの峠から遠望したマサカン峰。京大山岳部隊が1985年に初登頂に成功した（撮影：2018年11月21日、松沢哲郎）。

た。街の中心街といえる時計塔のある広場前のホテルに止宿した。

21日はプナカの日帰り旅行だった。ティンプーからプナカへは、ドチェラと呼ばれる3000メートルを超える峠越えの道になる。幸い、11月下旬で、ポストモンスーンの時期にあたり天候は安定していた。ドチェラからブータン・ヒマラヤの7000メートルを超える雪の山々の全貌を見ることができた。なんといっても最初に目をひくのは、左端に見えるマサコン（マサガン）峰である（図6）。1985年に京大山岳部の遠征隊が初登頂した。隊長は堀了平、副隊長は栗田靖之、登攀隊長が横山宏太郎であり、京大山岳部の現役学部生を主体とする遠征隊だ。登攀を指揮した横山宏太郎によると、



図7 ドチェラの峠から遠望するガンケルプンスム峰の南面。ブータンの最高峰でかつ未踏峰である(撮影：2018年11月21日、松沢哲郎)。



図8 ドチェラの峠に掲げられているブータン・ヒマラヤのパノラマ説明にあるガンケルプンスム(撮影：松沢哲郎)。

地元住民の聖山であることに配慮して、頂上のすこし手前で登山活動を終了した。すなわち厳密な意味での頂上を足で踏むことは遠慮したという。

ドチェラから見る正面の雪の連山もすばらしいが、右端にひととき大きく聳えるガンケルプンスム(ドチェラでのブータン側の表記を音読みするとガンカール・プンスム)に目が釘付けになった(図7、8)。ブータン・ヒマラヤの最高峰である。しかも未踏の最高峰だ。京大山岳部の同期生の高木真一が、京都の下宿の壁にこのガンケルプンスムの写真からおこした自筆の絵を掲げていたのが思い出される。高木は、1973年のヤルンカン遠征で8000メートルを超える高所で活躍し、翌1974年のK12遠征で

は初登頂に成功した。しかし7000メートルを超える高所で2晩の無酸素でのピバークを余儀なくされて帰還できなかった。同行の伊藤勤とともにシアチェン氷河側に墜落したと考えられている。

ドチェラの峠から見る、すなわちその南面を見る限り、ガンケルプンスムの登攀ルートはきわめて厳しい。雪と氷と岩の混じった急峻な稜線をたどることになる。はて、どうしたものかなあ、と考え込むうちにあつというまに休憩の時間が過ぎてしまった。

今回のプナカ行では、プナカ宮殿を歩き過ぎた先にある寺院を参観した。ブータンに何度も行っている坂本を含め、全員にとって初めて訪れる場所だった。車を停めて、川を渡り、左岸側の丘の上に登る。40分間ほどの登り路だった。行く手の右側には棚田が広がるのんびりとした風景で、上流に目を凝らすと雪をかぶった白い山が見える。日本学術会議会長、国立大学協会会長を兼務して、普段は多忙を極める山極総長に、菩提樹の下で憩うひとときがあった(図9)。

プナカ宮殿を見下ろすホテルのレストランで昼食をとった。訪問4回目にして初めて来る場所だった。川を挟んで対岸の右岸の高台から左岸の宮殿を見下ろすかたちになる。その景色が新鮮だった(図10)。全容がよく見渡せる。そのあと、いつものように橋を渡って宮殿の中を参拝した。帰途のドチェラで、夕暮れのブータン・ヒマラヤを再度見ることができた。やはりガンケルプンスムがすばらしい。

22日は、JSW法科大学と京大の合同シンポジウムをおこなった。JSW法科大学それ自体は、国民総幸福量(GNH)と法(Law)と発展(Development)がキーワードだという。先代国王の頭文字であるJSWが冠された大学である。それにちなんで言うと、正義(Justice)・奉仕(Service)・知恵(Wisdom)を旨とした大学にしたいとサンゲイ・ドルジ学長が述べていた。

朝いちばん、シンポジウムが始まる前に、それに参加するソナム・デチェン・ワンチュク王女に一行が謁見する機会を得た。約1年ぶりにお会いすることになった。お元気そうで、変わらぬお姿だった。山極総長らとしばし懇談され、他の参加者全員とのシンポジウム記念写真に納まった。主な出席者は、ソナム・デチェン王女、



図9 プナカの寺院の庭の菩提樹の下で憩う山極壽一総長（撮影：松沢哲郎）。



図11 シンポジウムで交歓する山極壽一京大総長とサンゲイ・ドルジ JSW 法科大学長。手渡しているのは写真集『Memories of a Sacred Kingdom』である（提供：京都大学ブータン友好プログラム）。



図10 プナカ宮殿を右岸の台地から遠望する（撮影：松沢哲郎）。



図12 ソナム・デチェン・ワンチュク王女の令息である活仏からサプライズの土産物をいただいた山極壽一総長と松沢哲郎（提供：京都大学ブータン友好プログラム）。

サンゲイ・ドルジ学長、そして最高裁長官のチェリン・ワンチュク氏はじめ、ブータン国立司法研修所、ブータン王立大学、ケサル・ギャルポ医科学大学の代表者らだった。山極総長から、持参した英語の写真集を手渡した（図11）。

22日の夕刻に、新首相に就任したロテ・ツェリン氏を訪ねた。2018年11月7日すなわち約2週間前に新内閣が発足したばかりだ。もともとは泌尿器科の外科医である。今回の隊員の加藤恵美子が、かつてのブータン滞在中に、同僚医師という関係ですでに面識があった。その医療手技の腕前を「天才的だった」と評した彼女のことが印象深い。メスを持ち替えて、国の

ために働くということなのだろう。

22日の夜は、ソナム・デチェン王女と、彼女のご尊母である第4代王妃の主催する晩餐会に招かれた。第4代王妃の邸宅である。尊顔を拝してみると、王女はどちらかという父親似だと思った。第4代国王には4人の王妃がいるが4人ともが姉妹である。その中の最も年長の方がこの王妃だ。気さくな方で、参加者ひとりひとりに対して、年齢やしごとの中身など詳細な質問をしておられた。

会食の始まる前にサプライズが用意されていた（図12）。ソナム・デチェン王女には二人の息子さんがおられるが、その下の息子さんがい

わゆる活仏になっている。まだ幼いが僧形である。その姿で挨拶に出てこられた。しかも、山極総長にはゴリラのぬいぐるみを、松沢にはチンパンジーのぬいぐるみを用意して下さっていた。それをくださるといふのだ。まったく予想もしていなかったのに、ただひたすら驚き恐縮したが、何ものにも代えがたいお土産を頂戴するかたちになった。

23日の午前中に、山極・松沢・坂本の3名が第4代国王にお会いすることができた。2010年に松沢は松林公蔵さんらとともにお会いしている。したがって今回が2回目ということになる。面談に先立って、ブータンの男性の正装の着物がわれわれ3人に下賜された。ゴと呼ばれる着物である。3人のゴは、それぞれ微妙に色と模様が違っていた。

先代国王みずからが玄関にまで出迎えて下さって恐縮した。約1時間にわたる懇談だった。国民総幸福量（Gross National Happiness）が、当初はHappiness（幸福）ではなくて、Content（満足度）という表現を考えたという。ただ言葉のもつインパクトから、正確さを求めるよりやはりHappinessにしたそう。そうした2010年の懇談のときにも述べられていたGNHがらみの持論を再度お聞きすることができた。

山極総長がゴリラ、松沢がチンパンジーの研究者ということもあり、話の冒頭から「ブータンにも類人猿（ape）がいる！」とおっしゃったのには驚いた。実際にいると信じるに足る証拠もある、実際にいるはずだからトラップカメラで撮影できるね、と先代国王は言う。「スノーマン」という言葉を使っておられた。イエティ、雪男のことである。ローメン・ツアーズを主宰するカルチュンの話では、ブータンのトレッキングの最長のものは「スノーマン・トレック」と呼ぶ1か月のものがあるという話を思い出した。「ぜひ、スノーマンを探しに行きたいですね」と申し上げた。

別れ際に差し上げた60周年記念写真集でも、1985年のマサコン峰の登山写真に目を留められた。信仰の対象である、聖山である、という思いが当方にはあったが杞憂だった。先代国王は登山という行為をネガティブにとらえるような発言はいっさいされなかったのが印象的だった。逆に、「実際に登ったのか？」「どんなところだった？」「自分も行ってみよう」という主

旨の発言だった。横山登攀隊長の言によれば、その山頂のすこし手前で引き返している。山を信仰対象とする地元民の気持ちにも寄り添うような、登山という行為でかかる自然環境への負荷も最小限にするような、新しい登山の仕組みや流儀をブータン・ヒマラヤから発信するというのはいかがだろうか。

先代国王との歓談ののち、荷物をまとめてパロ空港に向かった。同日午後にはパロを出て、タイのバンコクを経由して、行きとは逆のルートで翌24日朝に全員が関西空港に無事に帰着した。

2017年の招へい、2018年の派遣という2つの事業を通じて、ソナム・デチェン・ワンチュク王女という稀有な架け橋をもつことができた。ブータンから日本へ、日本からブータンへ、さらに多くの人材の交流が期待されている。京都大学ブータン友好プログラム第17次隊の派遣は、そうした将来への布石、ひとつのステップストーンになったといえるだろう。

謝辞

京都大学ブータン友好プログラム第17次隊の派遣は、平成30年度総長裁量経費に申請し採択された事業である。京都大学の10部局の合同事業だ。高等研究院・ヒマラヤ研究ユニット・東南アジア地域研究研究所・霊長類研究所・野生動物研究センター・教育学研究科・医学研究科・医学部附属病院・地球環境学堂・こころの未来研究センターである。その各部局の皆様の支援なしには本事業を実施できなかった。関係各位の尽力に感謝したい。ブータンとの60年の交流史を英語の写真集としてまとめるにあたって、栗田靖之、横山宏太郎、松林公蔵、竹田晋也氏はじめ京都大学学士山岳会の会員諸兄の協力を得た。また故中尾佐助さんの大阪府立大学所蔵の映像アーカイブの利用については山口裕文先生ならびに京大霊長類研究所長の湯本貴和先生、また故西岡京治さんの資料については夫人の里子様のご協力を得た。王女から下賜された絵本の翻訳については左海陽子氏、そのアニメーション化については、京都造形芸術大学の尾池和夫学長、丹羽貴大先生、西井育生先生らの協力を得た。またブータン側については、招へいして下さったソナム・デチェン・ワンチュク王女ならびにJSW法科大学のサンゲ

イ・ドルジ学長ならびにそのスタッフの皆様のお世話になった。王女のご母堂である第4代王妃と、ご尊父である第4代国王、さらにロテ・ツェリン首相には、貴重なお時間をいただいた。ブータン国内の旅の手配はローメン・ツアーズを主宰するカルチュン・ワンチュク氏のご支援をいただいた。紙幅の関係ですべての方のお名前を挙げられないが、こうした方々のご尽力に対して深く御礼を申し上げたい。

参考文献

1) 松沢哲郎 京都大学ブータン王国友好60周

年記念事業の概略報告、AACK ニューズレター、84号、1-3、2018

- 2) 坂本龍太、ブータンと京都大学との友好60周年の記念事業についての報告、ヒマラヤ学誌、No.19、10-22、2018
- 3) 松永倫紀、松井一純、松沢哲郎、京大ブータン連携60周年記念行事ロジスティクス、ヒマラヤ学誌、No.19、23-32、2018
- 4) 松沢哲郎、辻本雅史、池上哲司、成瀬哲生、出水明、ブータンにおける初等教育の素描：小学校とNAPEプログラム、ヒマラヤ学誌、No.6、93-110、1995

マサ・コン峰の頂上

横山宏太郎（1985年京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊登攀隊長）

1985年10月13日、私たち京都大学山岳部の登山隊は、マサ・コン峰に初登頂した。しかし、厳密な意味での頂上は踏んでいないことは、本号冒頭の松沢会長の文章にも示されたとおりである。30年以上の時を経て、当時のいきさつもしだいに忘れられているかもしれないので、ここに簡単に報告したい。

ブータンの登山解禁を受けて、京都大学山岳部では登山隊派遣計画を進めた。紆余曲折はあったが、最高峰ガンケルプンツムを第一希望とする登山申請書をブータン政府に提出し、同峰の登山許可を得た。しかし日本ヒマラヤ協会にも同峰が許可されていることが分かり、同時期に2つの隊が登山することの危険性をブータン政府に訴えるとともに、競合を避けるルートを検討した。1984年秋、偵察隊を派遣したが、地形から考えて容易なルートがありそうな北面には、国境問題から入城できなかった。堀了平隊長と私は、偵察隊の下山にあわせ、ブータンを訪問した。そこで偵察の結果を検討し、当初から第二希望としていたマサ・コン峰への登山対象変更を願い出ることにした。

堀隊長、偵察隊長の人見五郎君（隊の事務局長でもある）と私の3人で、サンゲ・ペンジョール観光通商大臣にお目にかかりお願いしたところ、大臣は快諾された。その時に、この山は聖山であることに配慮してほしいとおっしゃったので、私は、聖山を汚さないように頂上の少し

手前で歩みを止め、頂上そのものには触れないことを約束した。ブータン国の山に登らせてもらうのだから、ブータンの人たちの気持ちを大切にしなければならない。1955年、カンチェンジュンガ初登頂時の英国隊の行動が頭にあったので、それと同じように考えた。大臣はそれで了解してくださった。



写真1 マサ・コン峰頂上。横山の後ろに雪の高まりが見えている。

マサ・コン峰の頂上は、3つの雪のピークからなることが、C2から眺めて分かった。その中でどれが一番高いかは、行ってみないとわからないくらい、ほとんど同じ高さに見えた。C3から登って、手前のピークに立ちみると、一番奥のピークが高いことが分かった。あれが本当の頂上だ。あいだをつなぐ稜線は、右手に雪庇が出て、左側はすっぱりと切れ落ちている。月原の確保でロープを伸ばす。2つ目のピークで50mのロープいっぱいとなり、月原に来てもらって再びロープを伸ばす。意外に距離があって、このロープで足りるか心配したが、そろそろこの辺りで、と思ったところで「ロープいっぱい」と声がかかった。本当の最高点までは、いま写真を見直すと、数mくらいの距離だったろう。私はスノーバーで支点を作り、月原、

中山、人見が順次到着した。これでマサ・コン峰の初登頂はなった。

それから20年後、私たちはブータンを訪問し、マサ・コン峰との再会を果たした。その姿は、神が棲むにふさわしいものだった。ブータンのお世話になった方々とのパーティーで、スライドを上映しながら登山の様子を説明した。その中で、本当の頂上には触れていないことも伝えたので、皆さんも安心されたことだろう。ブータンの人たちへの尊敬と感謝の念からでたことであり、その気持ちはますます強くなっている。

参考

堀了平「偉大なる獅子マサ・コン峰登頂」
1986年、講談社
京都大学山岳部報告 第17号 1994年

アネサ伝

渡辺良男、中島道郎、新本政子、前田司

我らが笹ヶ峰ヒュッテの管理をお願いしていたアネサは女丈夫である。「アネサ」は「姉さん」が訛った呼名で本来は一般名詞である。ところが杉野沢では「アネサ」と言えば、我らがアネサの事を指す。杉野沢では「アネサ」は一般名詞ではなく固有名詞なのである。私(渡辺)が1回生の1964年7月に、ヒュッテ開店準備のためパンネと一緒に杉野沢に初めてアネサを訪ねた時の話である。バスを降りた所にいた2人の小母さんに「あの一、竹田さんの家はどこでしょうか?」と尋ねたら、「どこの竹田だね。こちらではみんな竹田だわね。」と言われた。杉野沢ではみんな竹田姓だとは気がつかなかった。さらにうかつなことに「竹田のアネサ」としか聞いてこず、名前は分らなかったので困った。「京大のヒュッテの管理をお願いしている竹田さんなのですか。」「ああ、アネサかね。アネサの家はあそこだわね。」という次第で杉野沢ではアネサが固有名詞であることを、このとき知ったのである。こんな訳で私はアネサの本名(竹田マサエさん)をその後も知らずじまいであった。アネサの御亭主(竹田克己氏)は当時、妙高高原町の町会議員をしていたと思うが、女房のアネサの前では頭があがらなかった

と記憶している。このたび、笹ヶ峰ヒュッテに関する思い出話をまとめていくなかで、アネサの事を抜きにして笹ヶ峰ヒュッテの昔を語れないと思い、皆様にアネサにまつわるエピソードや関連資料を提供いただいた。さらに新本政子さん(武庫川女子大鳴松山岳会)にも寄稿をお願いし、最後にアネサ本人にインタビューをしてまとめたのが本稿である。ご協力いただいた方々に深く感謝申しあげる次第である。

なお本稿では竹田マサエさんの名前は敬愛を込めて「アネサ」と記させていただきたい。「マサエさん」ではよそよそしすぎて実感がわかない。

渡辺記

中島道郎(1949年入部)

アネサに最初にコネを付けたのは私(中島)でした。彼女の旦那は、のちに妙高高原町の町長になった人物でした。その旦那の父親は「竹田新八」と云って、杉野沢村(当時)の有力者の一人でした。私は1951年と52年の2夏をヒュッテ担当者として過しましたが、当時はまだ米は配給制で、旅するには米を持参するか、「配給切符」を支給して貰ってそれを持参するか、しかありませんでした。ヒュッテのお客さ

んの中には米持参者もありましたが、多くは米どころ新潟の農村だから買えるだろう、と期待してくる人たちでしたから、彼らの期待に沿うため、3日に1度は、米の買い出しに麓の杉野沢村まで歩いて下っては、30kgずつ担ぎ上げたものでした。さてその米を売って呉れる家と云うのが問題でした。米は政府の独占商品で、農家は強制的に政府に“供出”させられ、勝手に売ってはならず、その禁を犯した者は罰せられたものです。但しそれは建前で、余裕のある農家は人並みに供出しても、あといくらかは手許に残るので、それを密かに売って家計の足しにしていたのです。それを“ヤミ米”と云いました。で、麓の杉野沢村の誰がヤミ米を売って呉れるのか？を当時の笹ヶ峰牧場で仕事をしていたクマさんだったか？が、「それは新八さに頼め。」と教えて呉れて、それから以後、竹田家と縁が繋がったわけです。

アネサは杉野沢小学校の先生だったので、美人で頭がよくて気立ても良かったため、青年団長からプロポーズされて一緒になった、という次第です。

京大ヒュッテとアネサとのそもそもの始まりは以上のような次第です。もう、70年近く昔の話です。

渡辺良男（1964年入部）

私（渡辺）は1回生の時、スキー合宿の荷揚げ（11月）と正月のスキー合宿、および3回生でのスキー合宿の3回、アネサに大変お世話になった。本稿では1回生のスキー合宿先発隊（アンニャ、西田、一席、オジン、上畠、渡辺）での思い出を記したい。

当時、東京オリンピックを契機にして高度経済成長時代に突入、それがレジャーにまで拡大した。とくにスキーは人気を呼び、日本のあちこちでスキー場開発がおこなわれていた。これに経済成長から取り残されると心配していた山村が飛びついた。杉野沢部落は雪深い山麓地にあり、その名が示すように杉を中心とした林業と農業のひっそりとした山村であったが、それが突然のように大規模スキー場開発となったので、我々が行ったときはまさに狂想曲であった。

1964年12月23日朝、田口駅（現：妙高高原駅）に着き、アネサ宅に伺う。先発隊の重要な役目の一つはヒュッテの正月に食べる餅つき

である。餅つきは午後から始めるということで、それまでストーブを囲んで、アネサから遠大なりゾート開発計画を聞かされる。五八木スキー場（現：妙高国際スキー場）開発に合わせて杉野沢の各家もあちこちで民宿開業に向けて大改装中である。アネサの所にも作業員が何人か泊っており、ちょっとした飯場ムードである。アネサ宅の改装も完成に近づいており、乾燥室や便所が出来あがっていた。今は盛んに畳を作っていた。アネサの所の最初の客は武庫川女子大山岳スキー部の合宿だという。この家が都会の女子学生で一杯になればさぞかし賑やかであろう。アネサの息子達は今からワクワクしている。もっとも会ったらがっかりするかもしれない。なにせ杉野沢はもともと美人の多い部落であるから期待しないほうがよい。江戸時代中期、姫路城主、榊原侯が吉原の傾城に入れ込んで身請けまでした。それが藩政不行届ということで越後高田に配置換えになった。このときの花魁の出身地は実は杉野沢だと噂に聞いた。この伝説の真偽のほどは分らないが、確かに杉野沢部落から高田に通学していた女子高校生は皆、別嬪であったことは確かである。アネサが息子達に「渡辺さんは高田高校出身だ」と紹介し、私をさかんに持ちあげる。息子達の畏まった顔の前で私は背中や尻がムズムズする。高田高校は上越地区の名門校で、地元中学生の憧れの高校であった。

モチ米が蒸しあがり、いよいよ先発隊最大の仕事である餅つきにかかる。アネサが手ほどきをして、えっちらおっちらつき始める。“合いの手”はアネサである。最初は一臼を2・3人で交代しながらついたが、慣れてきた頃、「若い男なら一人で一臼つけなくてどうするんだ」とアネサに発破をかけられた。一席が「よし！わしがやってやる。」と言って一人で一臼をつきあげた。「どんなもんだ！」。それで後は一人一臼で競争しだした。夜の10時までかかったが20臼つきあげた。最初から大変なアルバイトである。明日は大丈夫だろうか。アンニャは手に豆を作ってしまった。それにしても、つき立ての餅の旨い事、それも自らついた餅は。今日はアネサ宅に泊めてもらう。そして新築なった風呂まで使わせてもらった。風呂を使ったお客の第一号だとか。

お客に出す夕食の見本を食べさせてもらっ

た。冬は野沢菜の漬物とナメコの塩漬で食べていた杉野沢の生活感覚では正にお正月料理の御馳走である。でも口の驕った都会客には多少物足りないかもしれない。我々は内心、心配したが、アネサの意気込みに水を差すわけにもいかず、うまくいくことを祈るだけであった。

【特別寄稿】^{あらもと}新本政子
(武庫川女子大鳴松山岳会)

「竹田のおばさん」、私たちは最初からそう呼んでいました。

初めての出会いはこの「アネサ伝」の依頼を頂いた渡辺さんと同じ1964年12月。翌お正月の杉野沢スキー合宿を前に安田武先生引率の下、年末先発隊4名が笹ヶ峰に入山。私は2年生でした。京大ヒュッテや営林署に宿泊を断られ、和信の小屋と呼んだ沢沿いの汚い小屋での越冬でしたが、秋の紅葉の美しさに魅了された笹ヶ峰で新年を迎える事に感動していました。そして1965年新春スキー合宿。大人数の女子大生でてんやわんやの京山荘で新ちゃん、信ちゃん、幹ちゃん、まあちゃんの4人の息子さん達も“がっかり！”しながらお手伝いに大わらわだったかと。その頃「おばさん」はまだ40歳前後だったのですね。長いお付き合いの始まりでした。そして3月、火打登山を目指して再び笹ヶ峰へ。この時は京大ヒュッテに泊めていただきました。こうした妙高通いの中で(多分に安田先生の扇動?もありましたが)ヒュッテ建設の機運が高まり、その年の10月には三本木に武庫川女子大レルヘンヒュッテが生まれ、愈々竹田のおばさんにはお世話になることとなりました。今にして思えば、森の生活にあこがれた怖いもの知らずの呑気な娘たちが気楽に山へ入って行くことに、何かと心配して気配りをしていただきました。あの時期、気力充実のおじさん・おばさん・新八の屋号が随分と私たちを守ってくれたかとおもいます。

ママシが怖いというと、「何のそんなもの、前掛けをちょろっと振って食いついたら牙をひっこぬけば終わり!」。おばさんは結婚と同時に家の財布を握り家計を任されるのが嫁入の条件だったとかで、しっかりお手本にして家庭を牛耳った者も居て…。誰を相手にしても聞きたいことはしっかり聞き、言いたいことはしっかり言って、ヒュッテの行き帰りに立ち寄

る私たちに、檄を飛ばしていたことでした。

その頃から50年余、間遠になりつつも妙高通いの折々におばさんを訪ねています。その間いろんなことがあったでしょうに、辛口の批評は相変わらずですが、愚痴や泣き言を聞くことはなかったなど今改めて思います。数年前までピアノのレッスンに通い、美人のお孫さんの写真をみせては、まだまだ一人で大丈夫と頑張っていました。今年の春近所の方の話では、雪の季節は池の平の施設に入所とのこと。でも「ばあちゃんは何処でも相変わらずだから心配ないよ」と。

前田司(1963年入部)

昨年、AACKニューズレターに「昭和40年笹ヶ峰ヒュッテ改築の思い出」という一文を投稿しました。執筆中いつも思い出されたのは世話になった竹田のアネサのことでした。アネサの思い出を1、2書いてみます。

[1] 1965(昭和40)年、笹ヶ峰ヒュッテの大改築(AACKニューズレターNo.86号か京大山岳部「報告14号」参照)を無事終えた11月の末、お世話になった竹田克己、マサエ(アネサ)ご夫妻を京都にご招待した。ご主人の克己様は公務がありアネサのみお出でになったが、当時の歴代ヒュッテ係が京都をご案内した。時は紅葉の季節。京の名だたる紅葉処をお連れしたが、お帰りの際言われた一言、「京都の紅葉はどこもちっぽけ、私とこの妙高の紅葉はもっとスケールが大きいわい」と。

[2] 同改築の時、現場監督(実際は大工の給仕に成り下がったが)であった私は、台所に一斗炊きの大釜用のカマドを作ってもらった。翌年の夏、日本野鳥の会の信州支部の団体35名を受け入れた。朝飯と弁当用に8升の飯炊きをせねばならない。初めて一斗炊きの大釜の出番である。アネサに助っ人を頼む。そこでアネサはつきっきりで飯炊きを伝授。その飯のうまかったこと! 35人前のすばやい握り飯の作りかたも教わる。しかしヒュッテではこの後これほどの飯を炊くこともなく、アネサ伝授の釜飯炊きの腕前を披露出来ずに終わってしまった。

[3] 30数年前、ヒュッテの帰り道、竹田さんに寄るとアネサがおられ、小さな息子、娘たちにスイカやトウモロコシをご馳走になった。その上、ピアノの演奏まで聞かせていただいた。ア

ネサは元小学校の先生。村のインテリ、ハイカラ女性の片鱗を見せていただいた。

アネサとの再会 渡辺良男 (1964年入部)

2018年10月12日、笹ヶ峰ヒュッテにほぼ50年ぶりに行くことになり、この機会を利用してアネサを訪ねた。本稿はその時のアネサとの昔話を小生の責任でまとめたものである。

11時半頃、宮前バス停前のアネサ宅を訪ねる。50年前に訪れた同じ家である。玄関に入って土間を見た瞬間、昔ここで餅をついた情景が蘇ってきた。土間から、「アネサさん、いますか？京大山岳部だった渡辺です。」と呼ぶと土間の奥の部屋から「誰が来たんかね？」と、ついこないだ電話で聞いたアネサの大きな声で返事があった。土間の縁台から身を乗り出して部屋を覗いたらアネサが炬燵の前に座っていた。「やあ、やあ、よく来た、懐かしいね。」と言う。これから約1時間半にわたって2人で昔話を花を咲かせた。

アネサは今95歳、来月11月には96歳になるという。旧宅に一人で住んでおり、食事から洗濯まで何でも自分一人でやっているという。「自分でやれる間は自分でやらないとだめだね」。そして「午前中と午後に村を一回りし村人と立ち話をするのを日課にしている」。杉野沢は坂道だらけであるから、距離が短くても結構な運動量になるだろう。(一時膝が悪くなって電動車椅子を使っていたらしいが)「膝の悪い所もすっかり直ったよ、やっぱり歩かなければだめだね」。毎日、日記をつけており、早速、私の来訪を「午前中、元京大生、渡辺良男さんが来る」と、実にきれいな字で日記帳に書きこんでいた。さすがは小学校の先生をしていただだけはある。眼も耳もよく、記入の際にも眼鏡はかけなかった。ピアノは今でも練習しているとの事。「指を動かし、歩き、人と話をする、昼食には雪中梅を湯呑一杯呑む、これが私の健康法。医者にどこも悪くないと言われた。」と自慢していたが、確かにものすごく元気で丈夫である。はっきりとした声でよく喋る。

アネサは高等小学校を卒業後、東京にいた叔父さんに勧められて東京に行き、師範学校を卒業、教員免許を取得した。ところが戦争が始まり、東京にいては危ないから郷里に戻れと言う事で越後に戻った。そして三和村(現：上越市

三和区。雪中梅の酒造所がある)の小学校の教員になり国語から算数まで何でも教えた。そうこうしているうちに杉野沢に戻れと言う事で杉野沢の学校に移った。そしたら結婚話があるから嫁に行け、と言われ、当時の事であるから親の言いつけのまま、付き合い無しで結婚したと笑っていた。これで教員生活は終わり百姓生活が始まったと言う。「今は何でも機械ですっかり楽だけど、昔は田圃は大変だった。」と懐かしがっていた。

京大ヒュッテとの始まりは中島ダンナだと言っていた。「20代半ばの若い頃、痩せた学生がふらんふらんとやって来た。どこから来たんだね、と聞いたら京大ヒュッテだと言う。「飯は食ったのか？」と聞いたら、まだだと言う。それでマンマを食べさせてやった。それが中島先生だった。それからよく来て“腹減った”と言うから、その度に飯をたべさせた。」と笑っていた。アネサ宅で飯を御馳走になったのは中島ダンナだけではない。歴代の部員もアネサ宅に伺う度に飯を食べさせてもらっていた。「実は私もアネサ宅に寄るたびに“まだ朝飯も食べていないのか”と呆れられながら朝飯を食べさせてもらっていた一人です。」「そうかね。もっと優しく言えばよかったのに、“マンマ食ったか!”と言って食べさせていたな。」で、2人で大笑いである。妙高高原には早朝に着くことが多く朝食は食べていないことが多かったのである。実は今日も笹ヶ峰行バス時刻の関係でアネサ宅に伺ったのは昼食時になり、アネサの昼食を御馳走になってしまった。

建替え前のヒュッテの事はよく覚えていて、「あそこは水があるし、場所がいいだねか。」と言っていた。やはり主婦には台所の水回りが大事なのだろう。

前田司さんの記事にあるように1965年の秋、「一回、京都見物させてもらって楽しかった。初めて京都という所に行ってみたんだもの。それまで(嫁入り後は)どこも行かなかった。それからはヨーロッパにも行きましたし、シンガポールにも行きましたし、そこらじゅうに行きました。楽しかったな。」ということである。

居間の壁に沢山の写真や表彰状、感謝状がかかっている。それを見ながら引き続き話を伺う。御亭主が皇太子を案内している写真、御亭主が叙勲を受けた時の天皇名の表彰状や勲章、その

ときの夫婦で写っている記念写真などに混じって、国土計画の堤義明氏と一緒に写っている写真があり、堤氏の話になった。堤氏は妙高国際スキー場にやってくると何時もアネサ宅にやっ来て、アネサの作る味噌汁と漬物で飯を食べていったという。「ロジなら、社長なんだから御馳走が食べられるだろうに、こんな飯でいいんかね?」と聞くと、「ばあちゃんの飯を食べたかったから来たんだ。」と言ってくれたそうである。あるとき、堤氏に招待されて東京に行ったら、「ものすごい料理でたまげた。あんな豪勢な料理を普段食べているから、私の野菜と味噌汁だけの食事が却って気にいったのかな。」と言う。

1時間半近く経って、さすがのアネサも疲れしてきた、あるいは昼寝タイムを過ぎて眠くなってきたらしい様子が窺えたので、これでお暇乞いをすることにした。笹ヶ峰ヒュッテへの土産にと頂いた雪中梅1升瓶を前に抱えながら、アネサとの楽しい一時を後に置いてヒュッテに向かう。



写真1 アネサと渡辺。アネサ宅で。(2018年10月12日)

[追記]

1964年の年末にオープンした妙高国際スキー場のその後とアネサ夫婦の奮闘は、上之郷利昭著「堤義明の静かな挑戦」(雑誌プレジデント1986年6月号、pp.205-215)に詳しく紹介されている。それによると妙高国際スキー場の開発・運営会社がこの後わずか3年で倒産した。スキー場開設をあてこんで部落をあげて民宿開業に走った杉野沢部落はどこも多額の借金を抱え苦境に陥った。アネサの御亭主、克己氏はこの対策に奔走することになった。とにかくスキー場を再開してくれる会社を探さなければならない。この苦境を救ってくれたのは国土計画の堤氏であった。当初は「西武は独自に始める事業しかやらない。他の会社を買収するような事はやらない。」と難色を示す堤氏を、克己氏の人柄と努力でついにスキー場再開を引き受けてもらい、杉野沢の危機を何とか切り抜けることが出来た。これには御亭主を支えた、肝っ玉の据わった、“旨い味噌汁と漬物”の名人であるアネサの存在があったればこそだと紹介されている。アネサと堤氏の親交は今でも続いているそうである。



写真2 笹ヶ峰ヒュッテ地鎮祭でのアネサ夫妻(田中二郎氏提供 1999年7月4日)

笹ヶ峰ヒュッテ小屋番の思い出（1964年～1967年）

渡辺良男

笹ヶ峰には小学6年（1958年）のとき、火打山に登るために初めて訪れた。まだ定期路線バスはなく、自動車は麓の杉野沢で林道通行許可証をもらう必要があった。以来、中学、そして高校山岳部時代を通してしばしば訪れた地元の高原である。笹ヶ峰高原は国立公園内にあるため観光開発が制限され、キャンプ場以外にはほとんど建物はなかった。その高原の芝生の中、道路脇に小屋が独りポツと建っていた。目立たない小屋で高校時代は京大のヒュッテとは知らなかった。ヒュッテは戦前の1928年に建てられたとあるが、その当時の京都の人がどうして京都から遠い越後の、別荘地でもなかったここに目をつけたのか、実に不思議である。京大ヒュッテはヒュッテからの眺めがよく、水が確保されているなど、立地条件が素晴らしいだけでなく、建物も実に山小屋の風情があった。今は現代的なロッジスタイルに建替えられたが、ヒュッテ前の大木にかけられたブランコとハンモックは今も健在である。以下は建替え前の古き時代（1964年～1967年）の思い出である。

私は京大に進み高田から離れたので笹ヶ峰を訪れる機会はほとんど無くなるだろうと思っていたが、ヒュッテのお陰で引き続き縁があることになった。山岳部時代のヒュッテとの関わり方は3通りあった。第一は、山岳部1回生の正月はヒュッテでスキー合宿をする。この時は杉野沢のアネサに随分とお世話になった。自分は3回生の時もスキー合宿のリーダーとして参加した。第二は、ヒュッテでの生活を楽しむ、および笹ヶ峰周辺の山々に登りヒュッテを訪れる形である。第三は、夏休み期間中、ヒュッテを一般に開放して資金稼ぎをする。このため部員が交代で宿泊客の面倒を見るヒュッテ“勤務”である。私は家が高田だということもあって、帰省のついでに、あるいはヒュッテ勤務のついでに帰省したので、もっとも多くヒュッテに勤務したのではないだろうか。なおヒュッテは紅葉の秋にも短期間ではあるが開放していた。秋は暇な文系学部の部員が当番を担当していた。

工学部学生は“勉強に”忙しく、私は秋のヒュッテ当番はしたことはなかった。

夏のヒュッテ営業は5月末ごろの宣伝ポスター貼りから始まる。貼るのは京阪神の女子大だけである。そんな訳で客はほとんど女子大生である。時たま何かの間違いで男子グループからも問合せがあったが、訳のわからない返事をしてお引き取りいただいていた。山岳部には女気はない。大学そのものも女子は少ない。工学部などは私の年に入学した女子は建築学科の1名だけである。だから男子に来て頂こうという気は全くなかったのである。もう一つには公式に小屋営業を許可されている訳ではないので大々的に宣伝する訳にはいかなかったのである。

7月上旬になると営業開始準備のために当番がヒュッテに入る。1964年の1回生の時は南アルプス北部縦走の後の7月10日にパンネと一緒にヒュッテに入った。開店準備は大変である。まずは肉体重労働が待ち受けている。トイレ用とゴミ捨て用の穴掘りである。特にトイレ用は細長い長方形に、できるだけ深く掘らなければならない。掘る場所はヒュッテの傍で、毎年位置をずらして掘る。穴掘りが終わると、その上にトイレを組み立てる。それから2階の畳を全部敷いて、天気の良いければ毛布をすべて外に出して陽に干す。それから室内外の大掃除と修理である。日頃、自分の部屋をろくろく掃除しない部員であるが、客商売となればそうはいかない。あとは水路の点検・清掃をし、ヒュッテの前に幾つか座りテーブルを出し、木にハンモックとブランコをかけて開店準備が終わる。

肉体重労働も大変であったが、それ以上にきつかったのは粗食である。ヒュッテに置いてあるのは米と調味料だけである。これは杉野沢のアネサが定期的に補給してくれる。他の材料一切は当番が自ら調達しなければならない。ヒュッテでは泊り客に食事は提供しない。食事を提供するには保健所の許可が必要であり、そうすると税務署も見逃してくれなくなる。したがって宿泊客には食材持参で自炊していただく。すると帰りには余った食材を親切に置いていってく

れる。これが我々の最大の食料供給源であった。ときたまOBが家族連れなどで泊りに来る。OBは現役が何を期待しているか、何が窮乏しているかは、昔を思い出して分っているから過分な差入れをしてくれる。だからOBの来訪は大歓迎であった。ところが開店準備段階や開店直後ではこの両方とも無い。最悪な時期なのである。山の帰りであれば使わなかった予備食を捨てないで持ってくるが、もともと予備食にはたいした物はないし量も足りない。春先はヒュッテの周りで蕨が採れる。ということで毎食、蕨の味噌汁と甘味噌を作って飯を食べるとい生活が続く。お陰で頬がこけた“精悍な”顔つきになる。もっとも京都での下宿生活の食事にもたいして変わらなかった。金がなくなると生協食堂で素うどんとライスだけを注文し、無料の刻み葱と唐辛子をたっぷりかけて空腹をしのいでいた。

営業開始しても7月下旬までは客はあまり来ない。すると無駄飯を食わせておくことはできないという事で、高谷ノ池ヒュッテまで石油等の荷揚げアルバイトをせよとなる。石油1斗缶2缶を背負子につけて、ヒイヒイ言いながら高谷ノ池ヒュッテまで担ぎあげる。この謝金も半額は部に上納で、ヒュッテでの自分たちの食事には残り半分しか使えない。早く女子学生やOBが来てくれるのが待ち遠しくて、待ち遠しくて。

1回生のある時、富田幸次郎OBがお客さんを案内してヒュッテに来た。客は大学の施設課職員2名であった。ヒュッテが老朽化し大幅な改修が必要になったが、山岳部には大金どころか小金すらない。それで大学から改修費用を出してもらおう交渉をしていた。その現地調査のために職員が出張してきたのである。昼食になり、お客さんに何と岩魚（ニジマスだったかもしれない）が出されたのである。御馳走といえるものは、この岩魚の塩焼だけであったが、横で給仕を仰せつかった私達の目は思わず釘付けになってしまった。それに気がついたのか、お客さんは半分も食べなかった。客の帰った後、野良猫のように我々が残りものをきれいに平らげてしまった。“他人の食べ残しを食べるなんて！”なんという見栄はない。何せ剣岳の頂上で弁当ガラをあさって食べていたのであるから。

ヒュッテ当番の朝は早い。客が起きる前にト

イレ掃除を終わらせなければならない。クレゾールの強烈な匂いにエキヘキしながら丁寧に掃除をする。そして穴の中を覗いて底の“物”が隠れる程度に掘った時の残土をかけていく。土をかけすぎると早く穴が一杯になるし、少なすぎてもだめである。次に二手に分かれ、片方はヒュッテ周りの牛の糞を片付ける。笹ヶ峰は牧場になっていて、ヒュッテはこの牧場の中にあつた。牧場と言っても酪農牧場ではなく、農作業用の牛を農繁期の終わった夏に預かって休養させる牧場なので、牛舎はない。放牧されている牛は夜は高原の下の方にいる。そして朝になると草を食べながらヒュッテの上まで登ってくる。その後再び下の方へ移動して、そこで夕方まで座って反芻している。この朝の来訪時にヒュッテ周りに大量の糞をしていく。この片づけを我々がするのである。馬鹿にならない量である。チベットではヤクの糞を乾かして燃料にするという。これが乾けば燃料になるのかと不思議に思いながら片付けるが、燃やしてみたことは一度も無い。ここでは乾燥気候のチベットのように牛糞は簡単には乾燥しない。他班は飯を炊く。食事提供は許されていないが、米を炊いてあげることは許されていた。

日中は客の希望に応じて高原散歩の案内や、火打登山の案内をする。案内するのが可愛い女子学生だところも浮き浮きしてくる。これが縁になることを密かに期待していくのだが、そうなったという話は残念ながら私は聞いた事がない。どうしてなのだろうか（実際には何人かいたらしい）。一度、実に可愛い女子学生2人を火打山に案内したことがある。私はドキドキしていることを悟られないよう、すましているのが精一杯であった。ところが彼女達は私や山のことなどそっこのけで、知人が（性転換で）女性から男性になった話題で夢中である。私はどう口を挟んでいいのやら、結局黙って拝聴するだけで終わってしまった。仲間外れでなんとも寂しかった。

夕方になると牛が再び草を食べながら上がってくる。それがヒュッテのお客さんの夕食時とかち合う。晴れている時はヒュッテの中で食べるよりは外で食べる方が気持ちが良いので、客は皆、外に御馳走を並べて夕食にする。この時、飯炊き当番以外は棒を振り回して牛がヒュッテに近づかないようにする。牛は大概おとなしく

我々を避けて去ってくれる。ところが一度、当番が牛追いをさぼったのか、それとも牛がかまわず来たのか、お客さんの食卓に寄ってきてしまった。お客さんは大慌てで御馳走をほったらかして逃げだした。牛はその御馳走を鼻でひっくり返してしまった。我々は牛に代わってお客さんに平謝りである。

これは私がいた時の話ではないが、牛がヒュッテの入口に頭から突っ込んでしまったことがあるそうである。牛は後ずさりができない。そこで皆大慌てで食堂の椅子と机を寄せて部屋の真ん中に空き地を作り、牛を食堂まで追い込んでぐるりと向きを変えさせ、ようやく追い出したとか。この間、牛が暴れなくて良かった。

ヒュッテには電気が来ていなかったのので灯りは石油ランプである。毎日、ランプのホヤガラスを磨く。石油ランプが珍しいとみえて、よく客が横に座って見ていた。夜は食堂に集まって、磨いた石油ランプの下で、よく歌を歌った。京都四条の歌声喫茶でアルバイトをしながら沢山の歌を仕入れてきたゲボとタージが立派な歌集を作ってくれた。この歌集を使って次々と歌うのである。この歌集は今でも持っている。こうしてヒュッテの一日が終わる。

一度、名古屋のK学院大の女子学生が10人ほどやってきた。お嬢さん学校で有名な学校で、なかなか可愛い学生ばかりであった。このうちの一人が出かけたまま夜になっても帰ってこない。いくら夏だといっても高原の夜は冷えこむ。部員手分けして辺りを捜しまわると見当たらない。大変なことになった。朝になったら警察に届けようということになる。翌早朝、再び捜しまわったら鎮守の森と名付けていた林の付近で男子学生と一緒にいるのを発見した。2人で示し合せて笹ヶ峰に来、夜と一緒に野外で過ごしたらしい。見つけたチビタに「どう言ったのか。」と聞いたら、「無事で良かったですね、と言いました。」とニコニコ顔で言う。「なんで怒らなかったんだ。」とチビタに言ったら彼はきょとんとしていた。彼はきょとんと乙女の切ない恋心を大事にしたのであろう。

OBの来訪は差し入れがあるだけでなく、面白い人が多く、彼等から色々な話を聞かせていただき面白かった。大四郎OBが家族連れで来た時、私が高田出身だと聞いて「お前はあんな僻地の出か。」と盛んに感心する。それで「大

四郎OBはどちらの出身ですか。」と聞いたら胸を張って「俺は村松の出だ。」と言う。私には直ぐに分った。中越地方の村松町である。「ええ！村松って蒲原鉄道の村松ですか？」。「そうだ！その大都会、村松だ」。それで2人とも大笑いである。他の部員は“村松”とはどこなのか見当がつかないので、怪訝そうな顔をして私の方を見る。それで私が村松とは、いかに鄙びたのどかな所かを説明してやる。大四郎OBはその間、ニヤニヤしながら旨そうに酒を飲んでいく。

腹はいつでも減っていたが、それでも笹ヶ峰は天国であった。「笹ヶ峰は不思議な所、何もせぬのに腹が減る」と歌いながら、涼しい高原の風の中、ハンモックに揺られて昼寝をしていれば、腹が空いているのも忘れてしまった。

最後に牛との思い出を二つ紹介する。

真っ暗闇の中に不気味に赤く光る玉が10数個浮かんでいる。ぎょっとして思わず足を止める。光る玉はピンポンボール位かと思えた。これがわずかにではあるが揺れている。ここは笹ヶ峰高原の中で、私は酒の1升瓶を抱きかかえてヒュッテに戻るところである。月はなく、辺りは真っ暗である。それでも勝手知った笹ヶ峰高原なのでヘッドライトを点けずに歩いていた。そっとヘッドライトを点けた。闇の中に10頭ばかりの牛の姿が浮かんだ。こちらを見ている。そうか、あの赤く光る玉は牛の目玉だったのだ。暗闇で光る狼の目玉がこちらを窺うという話は物語でよく出てくるが、動物の眼が暗闇で本当に赤く光るといのは初めて見た。大きく開いた瞳孔から入ったわずかな光が網膜で反射され水晶体で集光されるので暗闇でも光るのであろう。いわゆる“赤眼”である。はてさてどうしようかと思ったら、牛がのそっと私の方に向かってきだした。慌ててライトを消す。牛は動きを止めるが、相変わらず赤く光る玉はこちらを見ている。ライトをつけると再び牛がこちらに動きだそうとする。慌ててライトを消す。待っていれば牛はどこかに行くかと思って、しばらく待ってみたが、群れは茂みの間を通る道路を占拠して移動しそうにない。彼等はここで夜を過ごすつもりらしい。私は酒びんを抱えたまま途方にくれた。

これは上級生4人と一緒に、開店準備のため

ヒュッテに泊っていたある夜の事である。当然、まだ客はいない。誰かが酒を飲もうと言いだして明星荘まで渡辺が酒を買って来いと言う。渡辺は明星荘を含め笹ヶ峰の地理をよく知っていたから（なにせ地元であったから）、この暗闇の中でも大丈夫だと思ったらしい。そして私は酒を飲まなかった、いな飲めなかったので、お前なら途中で飲んでしまう事はないだろうと笑いながらの御下命である。ノンベエは食物が無くては何かなるが酒が無いと駄目らしい。そう言えばドイツのハイデルベルグ古城でも籠城に備えて巨大なワイン樽があった。彼等もまずは酒がないと戦う気力は起きないらしい。

街灯も月明りもない暗闇の中、酒を買っての帰り道で牛の群れに通せん棒されたのである。牛が通してくれないのでは、こちらが遠回りして避けて行くしかない。ライトをつけると牛がライトめがけてくるので、ライトは点けられない。その上、この牧場にはまだ牛が沢山いるはずであるから、途中で他の群れに遭遇するかもしれない。ヒヤヒヤ物である。暗闇のなか、酒びんを抱えて出来るだけ藪の中の道を選んで歩く。かなり遠回りしたが、ようやく無事にヒュッテの灯が見える所まで来た。上級生が戸口の外に出て辺りを見渡していた。「おお、無事に帰ってきたか。どうしたんだ。何時まで帰ってこないの途中で一人で飲んでいたのかと心配したぞ」。牛の群れに通せん棒されていた話をしたら皆大笑いである。

女子学生のお客さん 10 人ほどを水が大量に湧いている泉まで案内していったときの事である。途中で囲いがしてあり、囲いの周りに牛が 10 頭ほど集まっていた。牧童が何人かいる。何をしているのかとそちらを見に呑気に近づいていった。すると牛が一頭、私の方に向かってくるのではないか。私はびっくりして手に持っていた棒を振り回した。普通なら棒を振り回せば牛は逃げていくのに、この時はかまわずどんどん近づいて来る。ついに牛と対せざるをえない

距離になり、棒で角の間を叩き、押した。そんなものは牛には全く通用しない。牛はかまわず押して来る。とても力で対抗できる相手ではない。私は押されてじりじりと後ずさりする、と思う間もなく転んでしまった。牛はちょっと立ち止まって脱げた私の靴に鼻を近づけ臭いを嗅いだ、すぐに角を下げて再び私に向かって来た。倒れている私は逃げようもなく絶体絶命である。スペインの下手な闘牛士のように牛に角で放り上げられるのであろうか。女子学生たちは声も上げず、固まってしまった。怪しからんのは牧童達である。私が女子学生たちの目の前で牛に転がされているのを笑って見物しているだけである。助けてくれんのか。角が私につっかかりそうになって、ようやく牧童数人が大声で牛に向かって行く。牛は途端に逃げ出した。私は窮地を脱した。牧童達は大笑いである。

今日、牛を集め一頭ずつ囲いの中に追い込んで予防注射をしていたのだそうである。この牛は農耕用なので普段は非常におとなしいのであるが、くだんの牛は注射された直後で気がたっていたらしい。それで女子学生を連れて近づいてきた生意気そうな男に腹いせで向かって行ったのだらうと言う。「牛を叩く時は、角の間なんか叩いても牛には痛くもかゆくもありやせん。鼻の頭を叩くんだ。犬も熊も鼻づらが急所だ。」と教えてくれたが、そんなことは知るか。それよりも笑って見ていないでさっさと助けてくれればよいのに。この後、引き続き女子学生を案内して高原を回ったが、なんとともバツが悪かった。

この数年後、牛の放牧敷地と人のいる場所との間に柵が作られ、人と牛の共存時代は終わったらしい。芝や草を食べてくれていた牛がヒュッテ周りからいなくなったら途端に灌木が生えだし、芝生の高原が藪の高原になりだしたそうである。それで今は人間が牛に代わって芝や藪を刈っているそうである。牛も農耕の仕事は無くなり、今はどうやっているのだろうか。

チョゴリザ登頂 60 周年記念の会 —公益社団法人 日本山岳会講演会ほか—

高村奉樹

昨 2018 年はチョゴリザ初登頂 60 年を記念して 6 月に京都大学で「探検大学の誕生」講演と展示会が催され、その内容はニューズレター前号に松沢哲郎会長、榊原雅晴特任副会長ほかによってすでに詳しく記されている。ここではその後の関連行事などについて報告する。

旧臘 12 月 1 日、日本山岳会年次晩餐会（於東京新宿京王プラザホテル）に先立つ講演会プログラムの第 2 部で、チョゴリザ初登頂 60 周年を記念して映画の上映と講演が行われた。今もこの初登頂がとり上げられたのは、それが第二次大戦後初めてひとつの大学山岳会が企画し、成功したゆえであろう。日本山岳会が総力を挙げ日本人として初めてヒマラヤ 8000m 峰 マナスルの登頂に成功した二年後のことである。映画「花嫁の峰チョゴリザ」を 30 分に短縮して上映、かねてよりぜひ観たいと望まれていた皇太子が臨席、鑑賞された。ついで平井一正会員が約 10 分講演して当時の海外登山の困難さとともに、この初登頂がその後のかれの人生をいかに変えたかを語り、「冒険心と持続する情熱こそが人生を豊かにし、ひいては日本のためになると思う」と未知への挑戦を促す言葉で結んだ。わたしたち隊員（後記）は、正面横



写真 2 年次晩餐会の鏡開き JAC 小林会長ほかと元会長斎藤惇生(右から二人目)(芳賀孝郎会員撮影)

の講演者席に座して紹介され、そのまま斜め横からスクリーンをみたので K2、ブロードピークそしてチョゴリザはどれもより鋭い峰々にえた。なお皇太子の臨席によって入場者数は制限され途中入場は許されず、多くの人たちがドアの外で立ち尽くすことになったのは気の毒であった。(注 1. プログラム第 1 部、第 3 部の概略は文末に記した)

講演後、チョゴリザ隊員の中島道郎 (88)、平井一正 (87)、岩坪五郎 (85)、高村奉樹 (84)、芳賀孝郎 (84) は、第 1 部、第 3 部の演者夢枕獭、小嶋尚両氏とともに別室で皇太子殿下としばし懇談する機会を得た。

中央席の皇太子は、周りのソファに座る私たちに問いかけられた。登頂隊が使った当時の酸素ボンベは、ずいぶん重かったらしいが結果として有効性はどうでしたと聞かれた平井は、途中で酸素は切れたが、大いに助けられたと正直に答えた。平井はときおり、最近なら酸素を使わない高度だったがと漏らしていたのだが・・・。また映画のベースキャンプの場面で、食糧箱のひとつに「うまいもの」と書かれていたが何が入っていたのかと問われ、食糧担当だった岩坪は「大学近くの公設市場で入手したあまり上等ではない佃煮類です」と答えて笑いを誘ったが、



写真 1 展示会場チョゴリザコーナーの平井一正、芳賀孝郎 (飯田肇会員撮影)



2018年8月5日チョゴリザ初登頂60年を記念して桑原武夫隊長の墓碑に詣でる

写真3 黒谷金戒光明院 桑原武夫隊長の墓前にて
前列中央は桑原文吉氏（榊原雅晴会員撮影）

よく映画を見みておられたことに感じ入った。

なお当時の隊員のひとりカメラマンの潮田三代治氏は101歳で健在である。

特別展示会場のチョゴリザ関係コーナーには、登頂時の平井、藤平の写真など多くのパネルがあり、一般への公開まえに芳賀がJAC小林会長とともに皇太子に説明した。またここでは「花嫁の峰チョゴリザ」の小画像が上映されて多くの人が見入っていた。

会場には著名な支部が提供した貴重な歴史的画像や物品が展示され、ほかに登山装備の多様性、変遷を示すコーナーにスベア、プリムスなどなつかしいケロシンストーブ10種類が並べられていた。

なお今回のチョゴリザ映画と講演、展示は芳賀孝郎会員が数年前よりJAC総務委員会に申し入れをし、その後平井も連絡相談に加わって実現した。また展示パネルの京都大学総合博物館からの借りだしについては榊原雅晴特任副会長および松沢哲郎会長の多大の支援を得た。記して感謝の意を表したい。

講演会後の年次晚餐会は、恒例となった日本酒 四海王樽（今西寿雄夫人寄贈）の鏡開きに始まる。これにはJAC小林会長のほか斎藤惇生元JAC会長が法被を着て加わった。次いで乾杯の挨拶に立った平井一正JAC名誉会員は「まだ山に登りたい」と心情を披露した。なお晚餐会のあとホテル上階の一室で、学習院大山岳会の右川、芳賀氏夫妻らの計らいで二次会が開かれ、AACKから斎藤、平井、酒井敏明らのほか横山宏太郎、中山茂樹が参加して、かつでの思い出話だけでなく、南極越冬生活の昨今

やJACの現状などを聴くことができた。

その他関連行事の紹介：

8月5日 アンチョコ会（注2）最終会開催

チョゴリザ登頂の翌年から続いてきたアンチョコ会も桑原武夫隊長没後30年の今年で打ち上げることになり、黒谷金戒光明院 塔頭常光院にチョゴリザ隊員の中島ほか5名をはじめ会員と関係者計29名が集まった。午餐のあと、文殊堂の上奥にある桑原武夫夫妻の墓前で梶田大介師による読経のあと子息文吉さんをはじめ全員で焼香した。そのあと岡崎の国際交流会館センターに移動して映画「花嫁の峰チョゴリザ」を上映したあと、この会の記録ビデオや写真を見た。会の半ばで世話役酒井敏明から過去60年の行事すべてを記したプリントが配られ、長く続いた会に別れを惜しんだ。いまや高齢者の多いこの会の進行に田中昌二郎、またしても榊原雅晴両会員の協力を得たことを記して感謝する。

なおこの会に今年も参加予定だった今川好則さんは5月に亡くなった。チョゴリザ遠征当時、在パキスタン日本大使館書記官補だった同氏は、隊の要請で特別に参加されて優れたウルドウ語を操って隊の運営に貢献されたうえ、コンダス峰の登頂もされている。こころより感謝してご冥福をお祈りする。

12月16日 福井県ふるさと文化館の秋季特別企画「没後30年 桑原武夫展」

特別企画展と行事は11月から開かれていたが、この日の平井の講演とチョゴリザ映画の会は定員50名の研修室で催されたが、予約制で満席だった。平井の講演はJAC講演会とほぼ同じだったが、聴衆から当時あなたを山に駆り立てたモチベーションは何であったか？などの質問がでてそれぞれ丁寧に答えた。会のおわりに高村はさる八月はじめチョゴリザ60年を機に、隊員はじめ関係者多数が集い黒谷の桑原武夫先生の墓碑に詣でて、先生を追悼したことを報告した。あの日、暗闇の中を降りてきた平井たち登頂隊員を、6900メートルのゴルすこし上で中島ダンナと出迎えたサポート隊としての役割を果たしたつもりである。

なお展示はつぎの各章に分けてそれぞれに一室が当てられていた。

第1章 ふるさと福井とのつながり

両親の東京高等師範在職中、敦賀の祖父母のもとで暮らした小学生武夫あてに父桑原隲蔵から送られた1917年のはがき、第四錦林小学生時代のスケッチ、通知表など、子息の文吉さんが保存されていたものだ。

第2章 重要な業績

愛用の文具やカメラ、パスポートなど身の回りの品、「ルソー研究」はじめ多くの刊行物、翻訳書、さらに丸山薫、室生犀星、鶴見俊輔と交わした書簡などが展示された。

第3章 山への挑戦

チョゴリザ関係で桑原さんのピッケルやスケッチブック。当時の真空管式無線機、酸素ボンベとマスク類、登山靴、ヤッケ、羽毛服、オーバーシューズなど高所用装備、高所用テントが展示されていた。多くは京都大博物館所蔵で、その借りだし搬送には榊原会員の協力を得た。

おわりに

チョゴリザへの初挑戦は1909年で当初K2を目指したイタリアのアブルッジ公の隊によるが、1958年当時の私たちは、登攀ルートとしては彼らの記録にあまり重きをおかず、すぐ前年にオーストリアのヘルマン・プールたちがとったドーム経由ルートを追った。しかしさいごはイタリア隊のルートを経由して登頂、先行者の見識に改めて敬意を表することになった。なお当時の隊付き写真家ヴィットリオ・セラが撮影した多数の写真乾板は、いまもイタリア国立山岳博物館に保蔵され、例えばコンコルディア周辺氷河の現状と比較するのに活用されていることを、先年放映された国際TVで知った。

私たちがチョゴリザに向かったとき、当時より半世紀前のアブルッジ隊の記録は古ぼけて見えた。桑原隊のチョゴリザ登頂もすでに60年もまえのことになった。私たちの登頂記録は現在ではどのように評価されるのだろうか。私たちは果たして何を残すことができたのだろうか。ただ助手の手をかりず、ひとり手巻き式35ミリカメラ アイモでキャラバンから高所まで映画撮影を続けた潮田カメラマンが残された記録映像は、間違いなく貴重な遺産といえるだろう。

チョゴリザを巡るその後のようすは、AACKニューズレター28・29号に平井が記しているとおり、1975年にオーストリア隊が南西峰登頂、86年にはスペイン隊が北東峰頂上で藤平

がおいたこけし人形を発見するなど話題は尽きず、その後もいくどか登頂されている。

以上の関連行事に先立つ昨年6月に催された講演会「探検大学の誕生」で、私がとりわけ印象深く聞いたのは、宇宙飛行士で京大宇宙総合学術研究ユニット土井隆夫特定教授による「有人宇宙活動へ」であった。15年ほど前、このニューズレターではAACKのこれからゆくべき道について多くの論議がかわされたことは多くの人の記憶にあるだろう。そこでは梅棹忠夫さんはじめ地球外にパイオニア・ワークの場を考えるべきだとする意見があり、その中心人物でもあった当時レター編集担当の北村泰一さんに、平井一正や私、山岳部長の松林公蔵が呼び出されて、AACKとしてぜひ取り組むべきだと強硬な申し入れを受けた。しかし私たちはそれをプロジェクトしてすすめるのは荷が重すぎて現実的ではないと断った。そのあと北村さんはさらにいくつかの主張を誌上に残したうえ、かれの主張を入れられないAACKを退会された。私は上記の講演会で京大に宇宙を生存圏とするための研究と教育の場がすでに存在することをはじめて知り、今昔の感に堪えがたく、あとの懇親会で土井教授にこの思い出を話して今後の研究教育の展開を祈った。

注

注1. プログラム第1部の作家夢枕獏氏の「山と旅」は、かれが『西遊記』に登場する玄奘三蔵に惹かれて、いくどかシルクロード、西域を訪ねた約30年前の旅の写真と講演。「なぜ玄奘はこれほど過酷な旅をしたのか。心の中に大変な飢え、知的欲望をいだいてそれを満たすために旅に出たのだろう。」と話したうえ「人間の本质は頭のなかに物語を描き、それを実現するために行動するところにあるのではないか。その点で山と旅とは近い関係にある。」と結んだ。

第3部、明治大学名誉教授小嶋尚氏の第20回秩父宮記念山岳賞受賞記念の講演「日本の山岳景観」では「日本の山が小規模ながら多様性に富んだ繊細な景観を示すのは、日本列島が大陸東岸沖の中緯度のモンスーン帯にあり、気温や降水量の変化が大きいことが要因である。また大陸の東側は西側

に比べて気温が低いので森林限界も低くヨーロッパアルプスより緯度、高度が低くても高山帯が現れる。」など最近確認された氷河の存在も含めて、日本の山岳景観の特殊性について総括した。

注2. この会はチョゴリザ登頂翌年から隊員を中心に例年8月初めに京都はじめ各地で一、

二泊で開かれ、アンナプルナ隊員が参加することから、アンチョコ会と名付けられた。最終会員は最長老の1953年京大アンナプルナ隊の舟橋明賢はじめサルトロ・カンリ、ノシャック隊員、1998年に登頂40周年のチョゴリザ再訪隊に参加した会員井上潤、新井浩、高野昭吾、前田司ほか約35名であった。

第48回雲南懇話会のお知らせ

山岸久雄

第48回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日時：2019年4月13日（土）12時50分～17時30分。

その後、茶話会。

2. 場所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）

<https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/about/access.html>

3. 懇話会の内容

（講師、演題、講演の順序など変更ある場合は、ご了承をお願い致します。）

(1) 「東ブータンの土着信仰 —シャショッパの事例から—」

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科
博士後期課程 渡邊美穂子

(2) 「生きるって、なに？ —自分らしく生きて、自分を好きになろう！—」

地球の広報・旅人・エッセイスト
たかのてるこ

(3) 「私のフィールドノート—岩木山からヒマラヤ・チベット、白神山地、津軽の山々—」

記録作家、津軽百年の森づくり代表、
明治大学山岳部炉辺会 根深 誠

(4) 「「穴」と「箱」の来歴：カトマンズ盆地の道ばたから」

関西学院大学社会学部教授、山岳部長、
AACK 古川 彰

会員動向

会員異動

編集後記

おかげ様で興味深い記事を掲載できました。著者の皆様たいへんありがとうございました。引き続き、いろいろな思い出を記録にとどめるご寄稿をお待ちしております。

残念なことに、昨年も何人かの会員のご逝去の報を目にしました。生前は山に限らず、あるいはそれ以上にお仕事などで活躍されたことでしょう。親しい方にはぜひ追悼文をお寄せいただきたいと思います。ご逝去から時間がたってもかまいません。どうぞよろしく願います。
横山宏太郎

次号原稿締め切り 2019年4月16日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2019年3月25日

発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎

発行所 〒606-8501

京都市左京区吉田本町（総合研究2号館4階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付

編集人 横山宏太郎

製作 京都市北区小山西花池町1-8
（株）土倉事務所